

延岡市文化財調査報告書 Ⅱ

1. 延岡市のオオバネム群落と塩沼地植物群落調査報告
2. 延岡市貝ノ畑および行藤神社境内の石塔群調査報告

1983

延岡市教育委員会

延岡市文化財調査報告書 Ⅱ

1. 延岡市のオオバネム群落と塩沼地植物群落調査報告
2. 延岡市貝ノ畑および行滕神社境内の石塔群調査報告

1983

延岡市教育委員会

例 言

1. この報告書は、延岡市教育委員会が実施した文化財の調査報告書であり、掲載しているものは延岡市域におけるオオバネム群落と塩沼地植物群落の調査、貝の畑および行滕神社境内の石塔群調査の2件である。
2. 本文の執筆には、その調査にあたった調査員、オオバネムおよび塩沼地植物群落調査については河野耕三〔延岡第二高等学校教諭〕成迫平五郎〔緑ヶ丘学園高等学校教諭〕石塔群調査については石川恒太郎〔宮崎県文化財保護審議会委員〕があたった。
3. 調査の計画および本報の編集には渡辺博史〔社会教育課文化財担当〕があたり、延岡市文化財保護審議会委員 甲斐常美氏の助力を得た。
4. 塩沼地植物の現地調査にあたっては藤原一絵氏〔横浜国大助教授〕望月陸夫氏〔秋田県立湯沢高校教諭〕の協力を得た。また原稿整理等については河野美穂子さん〔延岡養護学校教諭〕をはじめ、島田美枝子さん、大崎靖子さんにお手伝いいただいた。記して感謝したい。

延岡市のオオバネム群落と塩沼地植物群落調査報告

河 野 耕 三
成 迫 平 五 郎



宅地開発で破壊されたオオバネム生育地 沖田町

目 次

■ 延岡市のオオバネム群落と塩沼地植物群落調査報告

はじめに	1
I 調査地概要	2
II 調査方法	2
III 調査結果	2
i オオバネム群落	2
ii 塩沼地植物群落	4
1 塩沼地低木群落	4
A ハマボウ群落	
B ハマナツメ群落	
2 塩沼地草本群落	5
A アマモクラス(海水沈水草本植物群落)	
a コアマモ群落	
B ヨシクラス(低層湿原)	
a コウキヤガラ群落	
b シオクグ群集	
C ウラギククラス(塩生湿地草原)	
a シバナ群落	
b ナガミノオニシバ群集	
c ハマサジ群集	
D 上級単位未決定	
a ヒトモトススキ群落	
IV 摘 要	6
V 文 献	8
VI 図 版	15

は じ め に

有史以来、人類文化の中心的役割を持ってきた海岸地帯は、現在より一層その重要性を高め、かつ利用されている。そうした文化景観域の中にも、わずかな空間やわずかな微地形のちがいによって保護された特異な植物群落が残存している。このような群落は、郷土の環境・地史・文化等を考える上で重要な役割をもっている。近年の産業の急速な発達は、有史以来まがりなりにも環境と調和のとれた発達をみせていた日本文化の伝統を、次々と消失させている。このような時期に、特定の群落や、ある地域の環境保全基礎調査を実施することは、現在の社会的状況への対応として急務であり、今後の郷土の調和のとれた環境の保全の点から極めて意義が大きい。

延岡市は、日豊海岸国立公園の南半分を占める風光明媚な地形を多く有している。比較的高い山々が海岸まで迫り、急崖で海に接している所が多いために今まで産業開発が遅れていた。しかしながら、ここ2～3年の道路整備の進行に伴ない、各種の産業の発達する傾向が見られる。特に観光産業と水産業関係においては注目されているが、各地の多くの所が経験しているような刹那的な開発でなく、自然とのバランスの中で発展するような長期的、計画的な政策が強く望まれる。そのためにも郷土の自然の側から特に植生の診断書としての科学的な植生調査報告、および診断図としての精度の高い現存植生図は、これからのあらゆる生産的諸活動の基礎資料として重要視されなければならない。

本報は延岡市教育委員会の委嘱を受けて実施された調査・研究結果である。本年度は、希少な群落としてのオオバネム群落と、特異でやや希少な群落としての塩沼地植物群落についてのみ調査された。延岡市はもとより、県内においても希少な両群落についての報告は、1980年、河野が宮崎県北部・日豊海岸周辺の植生（未印刷）で塩沼地植物群落について報告しているにすぎない。今回は、オオバネム群落の植物社会学的位置づけと、塩沼地植物群落の分類とについて検討された。

I 調査地概要

延岡市は、およそ北緯 $32^{\circ}42'$ ～ $32^{\circ}29'$ 、東経 $131^{\circ}34'$ ～ $131^{\circ}51'$ で南北に長く、九州北東部の日向灘に面した位置にある。北・西・南は日向山地北東部の鏡山(645m)、桧山(1123m)、行藤山(831m)、鳥帽子岳(362m)などの山地帯によってさえぎられた東方に開かれた地域である。

農業気象10年報(農林省・気象庁)の気象観測資料(1966～1975)によると年平均気温は延岡で 16.6°C 、古江で 16.9°C 、年間降水量は延岡で2247mm、古江で2284mm、最寒月の月平均気温は延岡で 6.9°C 、古江で 7.4°C であって、ほとんどの地域が典型的な太平洋型気候域と言える。しかし、北・西部の山地帯は内陸性の気候が強い。

地質的には平野部に見られる第四紀の沖積層と、山地に見られる四万十層群の砂岩、粘板岩、頁岩を中心として、部分的に第三紀の花崗岩や第四紀の熔結凝灰岩が見られる。

延岡市のオオバナエムの生育が見られる地域は、北部では追内町の旭化成化薬工場付近から土々呂町榑津町にかけての海岸に近い低山地一帯である。南部は日向市美々津まで広がっている。一方塩沼地植物群落の生育が見られる地域は、内湾性の潮間帯最上部の海水～汽水域であり、島ノ浦から土々呂町までの海岸線に沿って点在している。オオバナエムは、文化景観域の二次的立地を中心にして生育しているのに対して塩沼地植物群落は自然景観域の自然立地の中に生育している。

II 調査方法

調査可能な植分について各植分の比較的均質部を中心に、全出現種について階層別に完全な種のリストが作られた。多層群落については各階層毎の全植被度が与えられた。ついで各層の出現種について全推定法(Braun-Blanquet 1964)により総合優先度(被度5階級 — Ellenberg 1956)と共に群度があたえられた。

現地調査で得られた調査資料は、ほぼ同じ群落に属すると考えられる資料ごとにまとめられ、それぞれの群落組成表に組まれた。各群落組成表は、素表→常在度表→部分表→区分種表→(総合常在度表)→群集表・群落表の手順で検討されまとめられた。

III 調査結果

i オオバナエム群落 (Tab. 1)

群落区分種であるオオバナエムは、チョウセンネムノキとも呼ばれるマメ科・ネムリグサ亜科・ネムノキ属の木本マメ科植物の一種であり、イラン南部から東の南アジア一帯と日本の

本州までの各地に広く分布しているネムノキとちがい、インド・中国南部・南朝鮮に分布し日本では、宮崎県日豊海岸南部にのみに分布する。木本のネムノキ属の生育の中心は熱帯から亜熱帯であり、世界に約50種が知られている。日本は木本のネムノキ属の北限に位置するため沖縄の一種を含めて四種しか自生していない。日本に分布するネムノキ属のネムノキは青森県下北半島まで、ヒロハネムは、トカラ列島から天草島まで分布していることを考えると、オオバナムは木本のネムノキ属の中でも特に冬期低温に対して順応が遅れている種と言える。オオバナムは、形態的にはアフリカ、インド、マレーシアなどの南アジア一帯に分布するビルマネム (*Albizzia lebbek* BENTH) に近似する。

県北の海岸に近い砂岩・千枚岩・頁岩を母岩とした向陽地乾燥斜面の落葉低木林の中には初夏5～6月頃に白またはピンクの花をつけたオオバナムを混生した林分が見られる。今回は、延岡市片田町で2地点、塩浜町で2地点、楠津町で2地点、で植生調査が実施された。

海岸に近い低山地の落葉低木二次林の多くは、ヤマハゼ、アカメガシワ・クサギ・カラスザンショウなどを優占して、多くのマント群落・ノイバラクラスの種を混生したクサギアアカメガシワ群団に属する植分である。

オオバナムの生育地もアカメガシワ、ヤマハゼ、キダチニンドウ、カラスザンショウ、ハマクサギ、イヌビワ、イヌザンショウ、クサギなどのクサギアアカメガシワ群団標徴種および区分種によってクサギアアカメガシワ群団のカラスザンショウアアカメガシワ群落として同定できる。しかしながら、オオバナムは土壤の乾性化と貧性化傾向が強い立地上に生育し、コナラ、コウヤボウキ、フジツツジなどのブナクラス、コナラミズナラオーダー、イヌシデコナラ群団に属する種が出現することにより、カラスザンショウアアカメガシワ群落からさらに区分される。隣接類似群落である海岸に直接面した立地に見られるハマセンダン群落からは、ハマセンダン、ハマニンドウ、カンコノキが欠如することによって区分される。また、九州西海岸に分布する類似群落のアオモジ群落からはアオモジを欠如することによって区分される。

オオバナム群落は、乾燥と貧化が最も強い立地に見られるツクシハギ・コシダ・ヌルデを区分種とするコシダ下位群落と、やや土壤の良好な立地に見られるビナンカズラ・チヂミザサ・ヤブラン・ヒサカキ・ネズミモチ・ツワブキ・クサスギカズラなどのヤブツバキクラスの低木・草本類によって区分されるツワブキ下位群落と、人為的影響が粗で伐採後やや時間の経過した立地に見られるアラカシ・シリブカガシなどの常緑高木の種の優占が目立ち、潜在自然植生に近い相観を持っているアラカシ下位群落とに下位区分される。

オオバナムの県北海岸に分布する由来は別にして、種の分布や生態的に考えてみて、元来県北海岸の崩壊地斜面などにわずかに生育していたものと考えるのが妥当である。特に生態的には、オオバナムが熱帯および亜熱帯性の木本であるために宮崎での生育期間の短かさからくるハンディが、同様な生産形態を持っている落葉低木の仲間との競争に敗れる結果とな

り、土着の落葉低木も嫌がる乾性・負養化立地でのみ生育を強いられているものと考ええる。。それはオオバネム群落の区分種としたコウヤボウキ、コナラ、フジツツジ、のいずれもが乾性貧化立地の植物であることから推測できる。一般に希少な植物群落は、文化の発展に伴ってその生育地が消失し、代表的な構成種も減少もしくは絶滅するのが普通である。しかし、オオバネム群落はオオバネムの落葉でマメ科植物としてのいくつかの生態的特性からくる耐乏性が、思いがけない人間の急激なる文化の発展の中で生じた自然破壊の無機質的立地に、種として拡大分布する結果を生み出したものと考ええる。文献が全くない現在、推測の域を出ないが、オオバネムの生育域は過去よりも拡大していると考ええる。しかしながら最近の自然破壊のスピードが、オオバネムの種子生産量と生長速度を大きく上まわっているため、1970年代をピークにしてこれからは急速に生育地域の縮小が考えられる。また特に注目すべき点は、オオバネムの結実率が他のネムノキなどに比較するときわめて悪いために、増殖させるにも時間が必要である。

1980年代になってから群落分布の中心である若葉町の林分は宅地造成のため破壊されてしまっている。わずかに残された他の植分も、これから数年のうちに破壊されてしまう恐れが十分にあり、造成計画に際しては、事前の調査を強く望みたい。更に今後のオオバネムの生態的研究と、現存する植分の行政的保護が急務となっている。

ii 塩沼地植物群落

県北の塩沼地には県内でも数少ない様々な植分が見られる。

1. 塩沼地低木群落（上級単位不明）

A. ハマボウ群落（Tab. 2）

延岡市大武町・塩浜町・石田町沖田川の河辺湿地には、夏緑広葉樹のハマボウの優占する低木群落が帯状に生育している。ハマボウの夏季の樹冠が密閉状態を形成するために、林内の植物の生育はきわめて悪い。出現種はアオツツラフジ、スイカズラ、センニンソウ、ヘクソカズラなどのマント群落のツル性植物が何種類か見られるにすぎない。県北では日向市細島にわずかに見られる程度で、県内でも希少な群落といえる。

ハマボウは神奈川県以南から奄美大島にかけての太平洋岸の海岸塩沼地に分布する。屋久島・種子島より南には、同じアオイ科のオオハマボウが分布し、アダンクラスの標徴種となっている。

B. ハマナツメ群落（Tab. 2）

延岡市塩浜の沖田川河口付近の低湿地及び櫛ノ浜には、ハマボウ群落と同様な立地に生育するハマナツメ群落が見られる。ハマナツメは浦城湾沿岸に点在分布しているが、群落形成している植分は櫛ノ浜の小群落の他はもう残されていない。群落構成種はハマボウ群落よりわずかに多いが、それでも10種にみたない。

ハマナツメは、静岡県以南からインドシナ半島付近にかけての海岸湿地に分布している。ハマナツメ属は南ヨーロッパからアジアにかけて6種分布しているが、ほとんどが塩水性低湿地に生育している。

日本では海岸低湿地の多くが破壊されてしまっているために、ハマボウ群落以上にほとんど見られなくなった群落である。宮崎県内の分布を見ると、延岡市以外では日向市竹島に見られるが、細島臨海工業地帯の埋立ての影響ですでに陸化しており、群落遷移が進んでヨモギクラスになりつつある。その他では、串間市石波海岸にわずかに分布している程度である。

ハマナツメ群落はハマボウ群落とともに、屋久島・種子島以南に分布するアダンクラスに対応した塩沼地マント群落として独立した単位として位置づけられるものとする。延岡市塩浜のハマナツメ群落は、その後河辺の埋め立てにより無残にも伐採されてしまっていることが1981年2月の現地視察で明らかになった。生命集団の基盤である植生環境を重視するならば、少なくとも移植の方策が講じられるべきではなかったかと考えられる。

2. 塩沼地草本群落 (Tab. 3)

A. アマモクラス (海水沈水草本植物群落)

a. コアマモ群集

干潮時にも植物が乾燥しない程度の水が残る泥～砂泥質立地に見られる。コアマモを標徴種とし、一種のみで構成される単純群落である。各河川の汽水域から海水域にかけて見られる。熊野江、須美江、浦城、北川、五ヶ瀬川、祝子川、沖田川、櫛津の河口付近に点在する。

B. ヨシクラス (低層湿原)

a. コウキヤガラ群落

河口付近の満潮時0.5～0.7m内外海中に沈する泥質立地や中小河川の水深0.5m内外の泥質から砂泥質立地に見られる。コウキヤガラで区分される。大武町五ヶ瀬川河口に分布している。

b. シオクグ群集

河口付近の満潮時に桿の半分は海水や汽水に沈するヨシクラスの最前線の立地に帯状に分布する。シオクグを標徴種として1～数種より構成される群落である。各地の河辺・河口付近に見られる。

C. ウラギクラス (塩生湿地草原)

a. シバナ群落

櫛津や浦城町雨場の泥質立地に見られる。立地的にはシオクグ群集に似ているが、満潮時

により深く冠水するもっと前線に位置する。シバナを区分種とする。県内では他にまだ調査されていない。

シバナ群落は後背地のやや高い立地に生育するシオクグを伴ったシオクグ下位単位と、最前線に生育するシバナ一種のみで構成される典型下位単位に下位区分される。

b. ナガミノオニシバ群集

河口付近の満潮時の最上位域の主として砂礫質立地に狭く帯状に、あるいは島状に発達する。ほとんどナガミノオニシバ一種よりなる植被度の高い植分である。榑津・五ヶ瀬川河口・浦城町甫場・熊野江などに小面積で分布している。

ナガミノオニシバ群集は泥質傾向が強いシオクグ亜群集と特別な区分種のない典型亜群集とに下位区分される。

c. ハマサジ群集

河口や入江の砂礫質立地に生育する。干潮時には高濃度含塩立地を形成し、満潮時には半かん水する厳しい環境の所に生育するため、多肉質の茎葉を持っているハマサジが優占する。ハマサジを標徴種としハマゼリを区分種とする。榑津・浦城町甫場、熊野江、島ノ浦で調査された。

ハマサジ群集は干潮時の乾燥が強くない立地に一般に見られるナガミノオニシバが高い被度で常在するナガミノオニシバ亜群集と、浮標有機物の比較的蓄積する最上位に帯状に見られるハマツツナ亜群集と、干潮時乾燥が強くしかも満潮時により深く冠水する立地に見られる典型亜群集とに下位区分できる。

D. 上級単位未決定

a. ヒトモトススキ群落

海水の飛沫地帯や塩沼地周辺の低湿地には植生高2.5～3 m前後で叢生した大型のカヤツリグサ科の草本群落が点在する。群落密閉率が高いため、出現種はきわめて少ない。浦城町甫場で調査された。

IV 摘 要

今回の調査は、オオバネム群落と塩沼地植物群落との現状把握の目的で、延岡市教育委員会から委嘱を受けて実施された。

延岡市は、海岸線の変化に富んでおり、自然環境に大変恵まれている。そうした自然環境の中や、人為的環境の中に特異で希少な群落がまだ残されている。オオバネム群落と塩沼地植物群落の各残

存植分について現地調査が実施された。現地で得られた植生調査資料と既報の資料とを室内作業における群落組成表の比較・検討の結果、以下の群落体系が明らかにされた。

I クサギーアカメガシワ群団（上級単位未決定）

オオバネム群落

II アマモクラス

アマモオーダー

アマモ群団

コアマモ群集

III ヨシクラス

ヨシオーダー

ヨシ群団

シオクグ群集

コウキヤガラ群落

IV ウラギククラス

ナガミノオニシバオーダー

ナガミノオニシバ群団

シバナ群落

ナガミノオニシバ群集

ハマサジ群集

V 上級単位未決定

ヒトモトススキ群落

VI 上級単位未決定

ハヤボウ群落

ハマナツメ群落

愛宕山から土々呂町にかけての地域は、オオバネム群落の生育中心域である。保護は適当な人為的影響下のもとで十分可能である。今後文化景観域の中の小緑地として積極的に取り入れ、利用と保護の両面からの施策が必要である。

自然度の最も高い塩沼地植物群落が島ノ浦・熊野江・浦城・五ヶ瀬川河口・沖田川・土々呂町楠津に残されている。県内でもほとんど見られない希少な群落であり十分保護する必要

がある。塩沼地植生は立地環境の変化に大変敏感な弱い自然であり、保護は周囲の環境と一体化した中で注意徹底されなければならない。沖田川は塩沼地低木群落の県内最大の立地であるにもかかわらず開発が進み、今回の調査直後には県内で数少ないハマナツメ群落が何の事前調査も実施されず、無残にも切り倒され、土砂によって埋め立てられている。塩沼地植物群落と同様に、オオバネム群落も調査の後から次々と生育地が破壊されていっている。

植生は、人間を含めたすべての生物的生産の基盤であり、地球的規模で破壊されている現在、生物として、人間として生存するための最底の植生を残すべき時代にきている。今後のすべての開発に対して十分なる事前の調査と検討が実施されることを望みたい。

V 参 考 文 献

1. 宮脇昭・奥田重俊・望月陸夫 1978：日本植生便覧 850PP. 至文堂. 東京
2. 宮脇昭・奥田重俊・鈴木邦雄 1975：東京湾臨海部の植生 119PP. (財)運輸経済研究センター 東京
3. 宮脇昭他 1972：神奈川県 の現存植生、789PP 神奈川県. 神奈川
4. 宮脇昭他 1977：薩摩半島北部植生調査報告書 180PP. プレック研究所. 東京
5. 河野耕三 1980：宮崎県北部・日豊海岸周辺の植生. 宮崎県. 宮崎
6. E. J. H. Corner. K. Watanabe. 1969：図説熱帯植物集成 1104PP. 廣川書店. 東京.
7. 初島住彦 1971：琉球植物誌 866PP. 沖縄生物教育研究会. 沖縄
8. 宮崎県 1971：宮崎県の地質と資源. 69PP. 宮崎県 宮崎
9. 農林省・気象庁 1977：農業気象10年報（昭和41年～昭和50年）—宮崎県— P. 4～P. 147 農林省・気象庁.

Tab. 1 オオバネム群落

調査番号 調査年月日	1 '80 10 9	2 '80 10 9	3 '80 10 8	4 '80 10 8	5 '80 10 8	6 '80 10 8
海拔高度 方位傾斜	15 S20W 10 4×15	24 W 10 15×15	30 NE 30 15×10	31 N60W 30 15×15	13 N 40 10×15	17 N 35 10×15
高木層の高さ 高木層の植被率	— —	8 90	7 50	8 60	5 60	7 70
低木層の高さ 低木層の植被率	5 40	4 50	2 40	3 60	2 20	3 30
草本層の高さ 草本層の植被率	0.8 90	0.5 60	0.4 70	0.4 60	0.5 10	0.5 30
出現種数	15	24	30	31	13	17
群落区分種						
オオバネム	2・3	2・2	3・3	3・2	2・2	3・3
コウヤボウキ	S	3・2	+	+2	2・3	2・3
コナラ	B	3・2	+	+	2・1	2・1
群団標識種および区分種						
フジツツジ	S	+	+2	+	+	+2
アカメガシワ	S	+	+	+	+	+
ヤマハハゼ	B	2・1	+	2・2	2・2	2・2
キダチニンドウ	S	+2	+	2・3	+2	+
カラスザンショウ	B	+	+	2・3	+2	+
ハマクサギ	S	+2	+	2・1	+	+
イヌザンショウ	S	+2	+	+	+	+
クサギ	S	+	+	1・2	+	+
下位単位区分種						
ツクシハギ	S・K	+	±	+	+2	+
コシダ	K	3・3	+	+	±	±
ヌルデ	S	+	+	+	+	+
ビナンカズラ	S	+	3・2	+	+	+
チヂミザサ	K	+	2・2	+2	+	+
ヤブラン	K	+	+2	2・2	+	+
ヒサカキ	S	+	+	3・3	+	+
ネズミモチ	S	+	+	+2	+	+
ツワブキ	S	+	+	1・2	+	+
クサスギカズラ	K	+	+	+2	+	+
アラカシ	B	+	+	+	3・4	2・3
シリブカガシ	B	+	+	+	±	+
ノイバラクラスの種						
ヘクソカズラ	S・K	+2	+2	+2	+	+
カニクサ	S	+	+	+	+	+
ヤマフジ	B	+	+2	+	+	+2
サルトリイバラ						
ノイバラ	S	+	+	+	+	+
センニンソウ	K	+	+	+	+	+
ナガバモミジイチゴ	S・K	+	+2	+2	+	+
ヤマノイモ	S	+2	+2	2・2	+	+
オオバウマノスズクサ	S・K	±	+	+2	+	+2
アオツツラフジ	K	+	+	+	+	+
ヒメドコロ	S・K	+2	+2	+	+	+
ミツバアケビ	S	+	+	+	+	+
ナワシロイチゴ	K	+	+	+	+	+
ヤブツバキクラスの種						
クチナシ	S	+	+	+2	+	+
マルババベニシダ	K	+	+	+2	+	+
サザンカ	S	3・2	+	+	+	+
タブノキ	S	+	+	+	+	+
クロキ	S	+	+	+	+	+
ヤブコウジ	S	+	+	+	+	+
ナワシログミ	S	+	+	+	+	+
フユイチゴ	K	+	+	+	+	+
テイカカズラ	K	+	+	+	+	+
アマクサシダ	K	+	+	+	+	+
シヤリンバイ	S	+	+	+	+	+
マンリヨウ	S	+	+	+	+	+
ジャノヒゲ	K	+	+	+	+	+
シユンラン	K	+	+	+	+	+
その他の種						
ススキ	K	4・5	+	+2	+	+
スギ	S	(2・1)	+	+	+	+
アカマツ	S	(+)	+	+	+	+
ガマズミ	S	+	+	+	+	+
カマツカ	S	+	+	+	+	+
ササクサ	K	+2	+	+	+	+
シラヤマギク	K	+2	+	+	+	+
タチスボスミレ	K	+	+	+	+	+
ムクノキ	K	+	+	+	+	+
クストイゲ	B	+	+	+	+	+
イヌトウバナ	S	+	+	+	+	+
イネ科 SP.	K	+	+	+	+	+
コバノガマズミ	K	+	+	+	+	+
ワラビ	S	+	+	+	+	+
ノジギク	K	+	+	+	+	+
ツユクサ	K	+	+	+	+	+

調査地：1・2 延岡市片田町, 3・4 延岡市塩浜町, 5・6 延岡市櫛津

調査者：河野・成迫

Tab. 2 塩沼地低木群落

A:ハマボウ群落

B:ハマナツメ群落

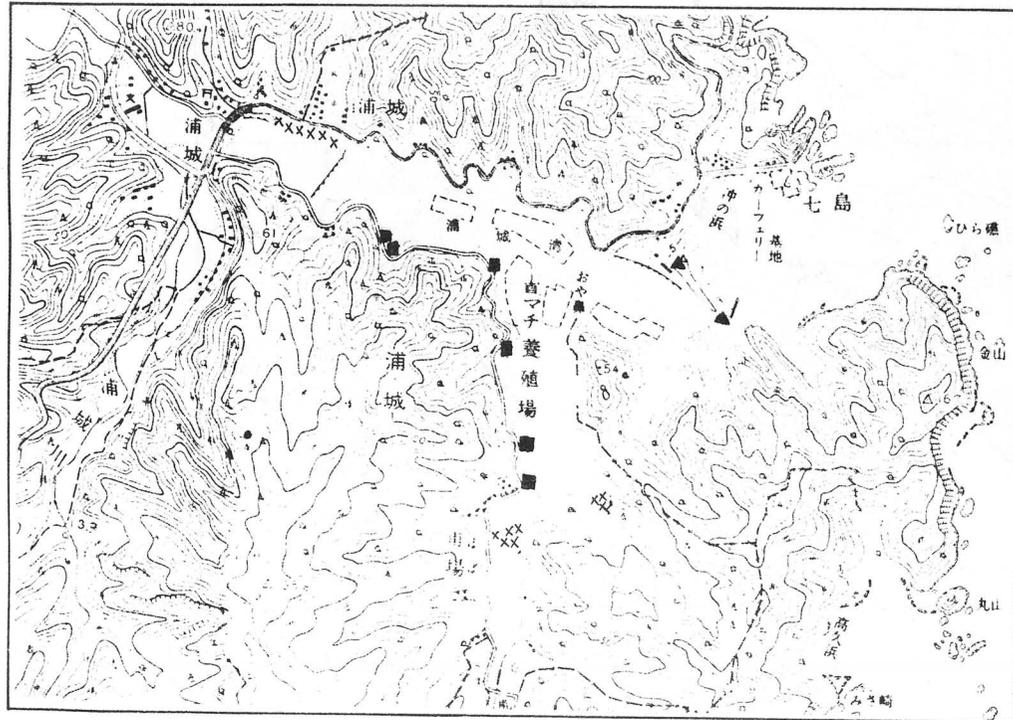
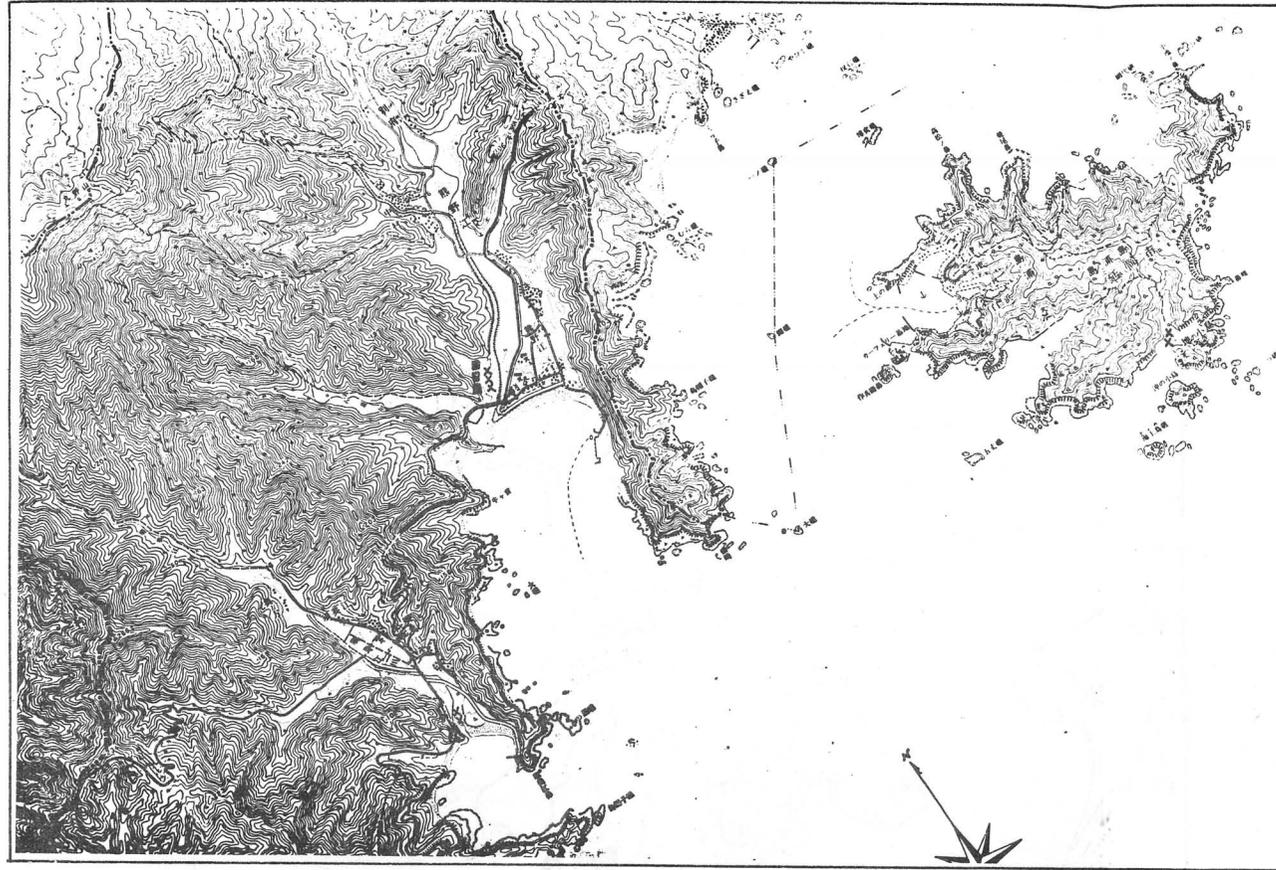
		A			B	
通し番号		1	2	3	4	5
調査番号		M60	K388			
調査年月日		'78	'79	'80	'80	'80
		8	12	9	8	8
		19	26	13	6	6
海拔高	(m)	0	0	1	1	1
調査面積	(m)	4×5	5×5	4×5	5×10	4×15
低木層の高さ	(m) S	3.5	4	4	5	4
低木層の植被率	(%)	90	95	95	90	95
草本層の高さ	(m) K	1.5	0.2	0.5	0.2	0.3
草本層の植被率	(%)	2	3	5	2	1
出現種数		3	5	5	7	7
群落区分種						
ハマボウ	S	5.5	5.3	5.4	+	
	K	+	+			
群落区分種						
ハマナツメ	S				5.5	5.5
随伴種						
アオツラフジ	S	+	+	2.3	+2	+
	K					+
スイカズラ	S				+	+
	K			+2		+
ヨシ	K	+	+			
センニンソウ	S				+	+
	K					+
ノイバラ	S・K				±	+
テリハノイバラ	K		+			
ヘクソカズラ	K		+			
アキグミ	S			+		
マサキ	K			+		
ノジギク	K				+	
コバノタツナミ	K					+
クサスギカズラ	K					+

調査地: 1 : 大武町, 2・4・5 : 塩浜町沖田川

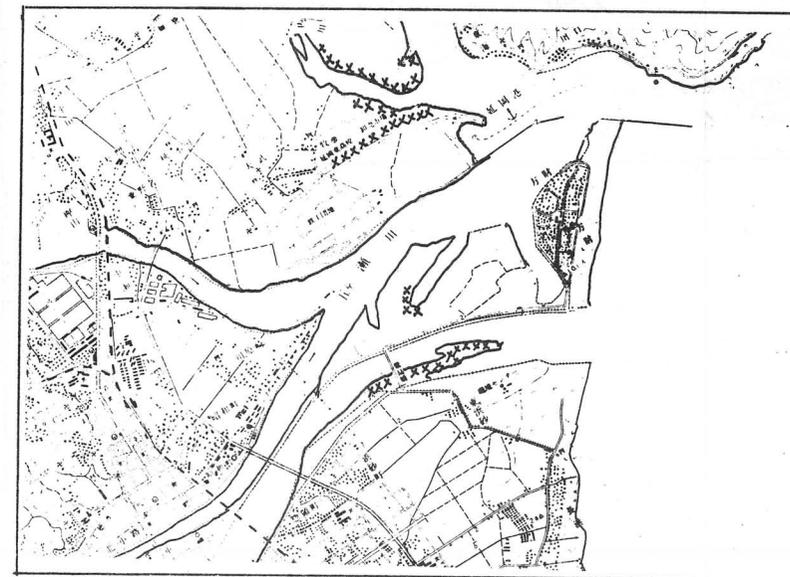
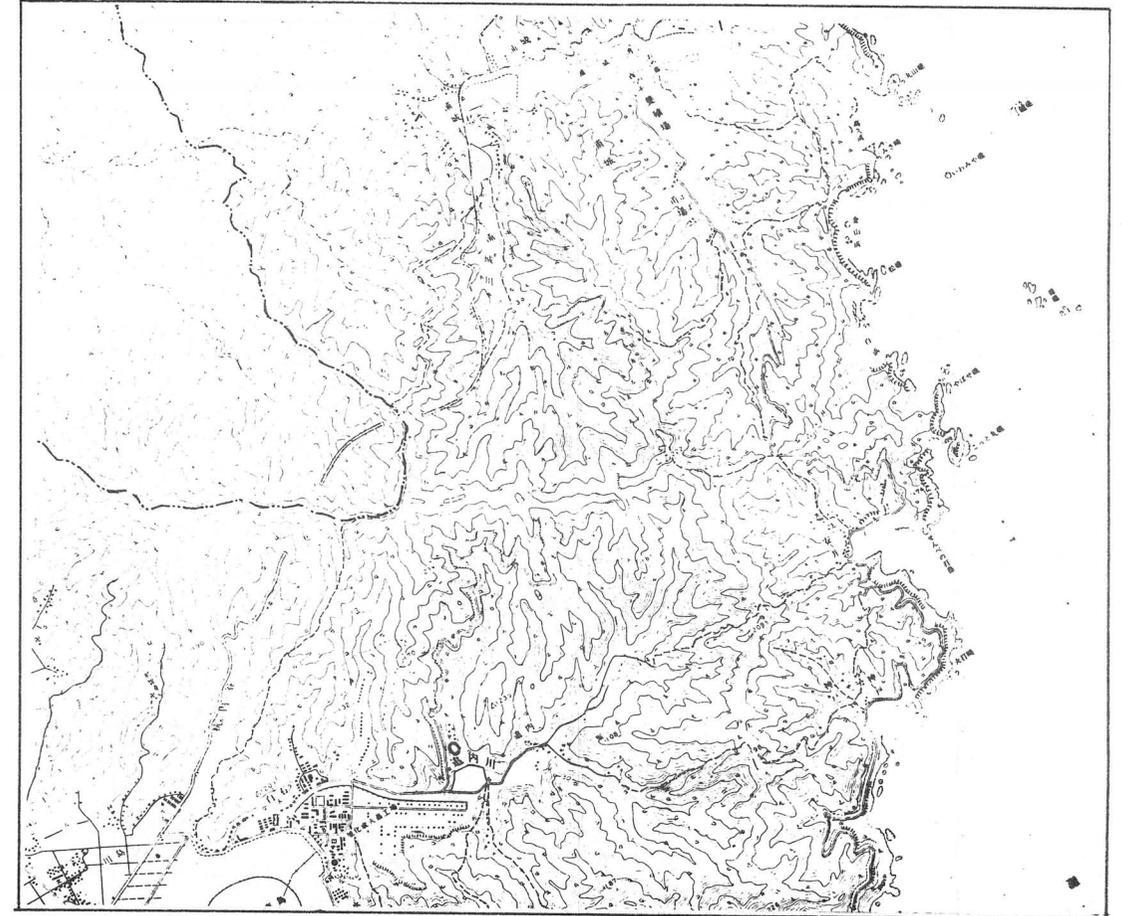
3 : 石田町沖田川

調査者: 1 : 藤原・望月・河原, 2・4・5 : 河野

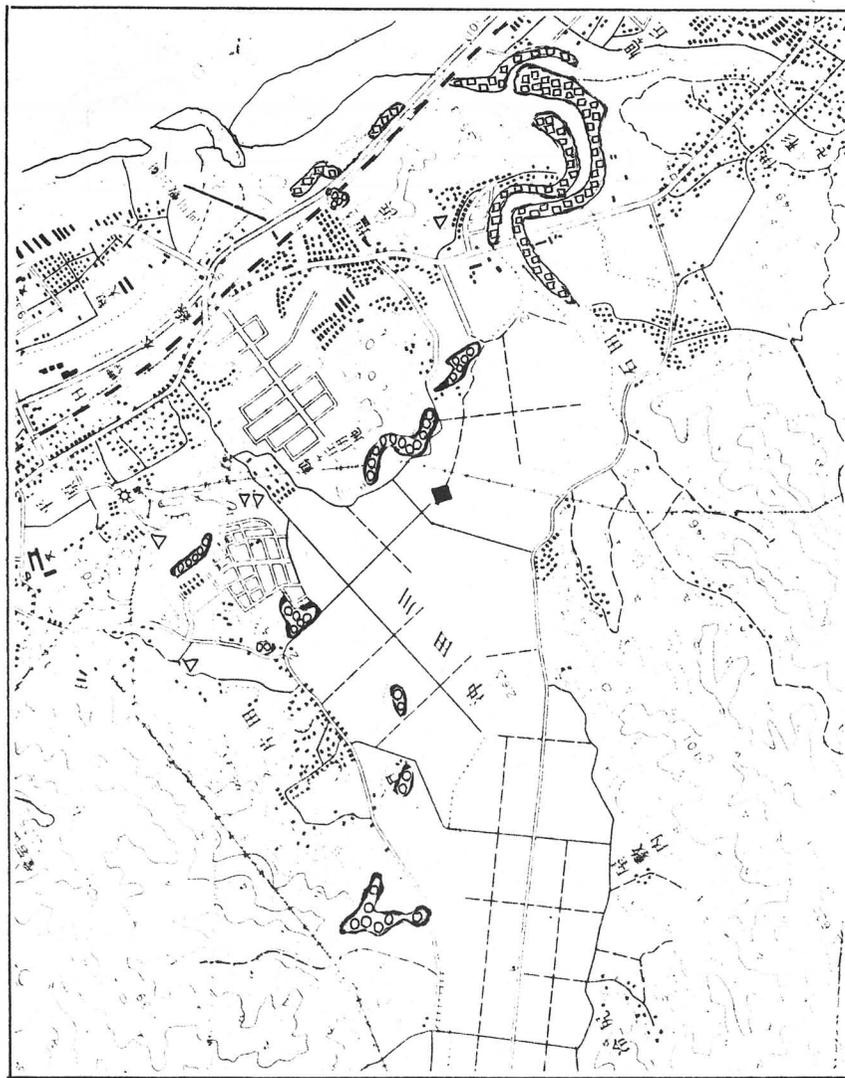
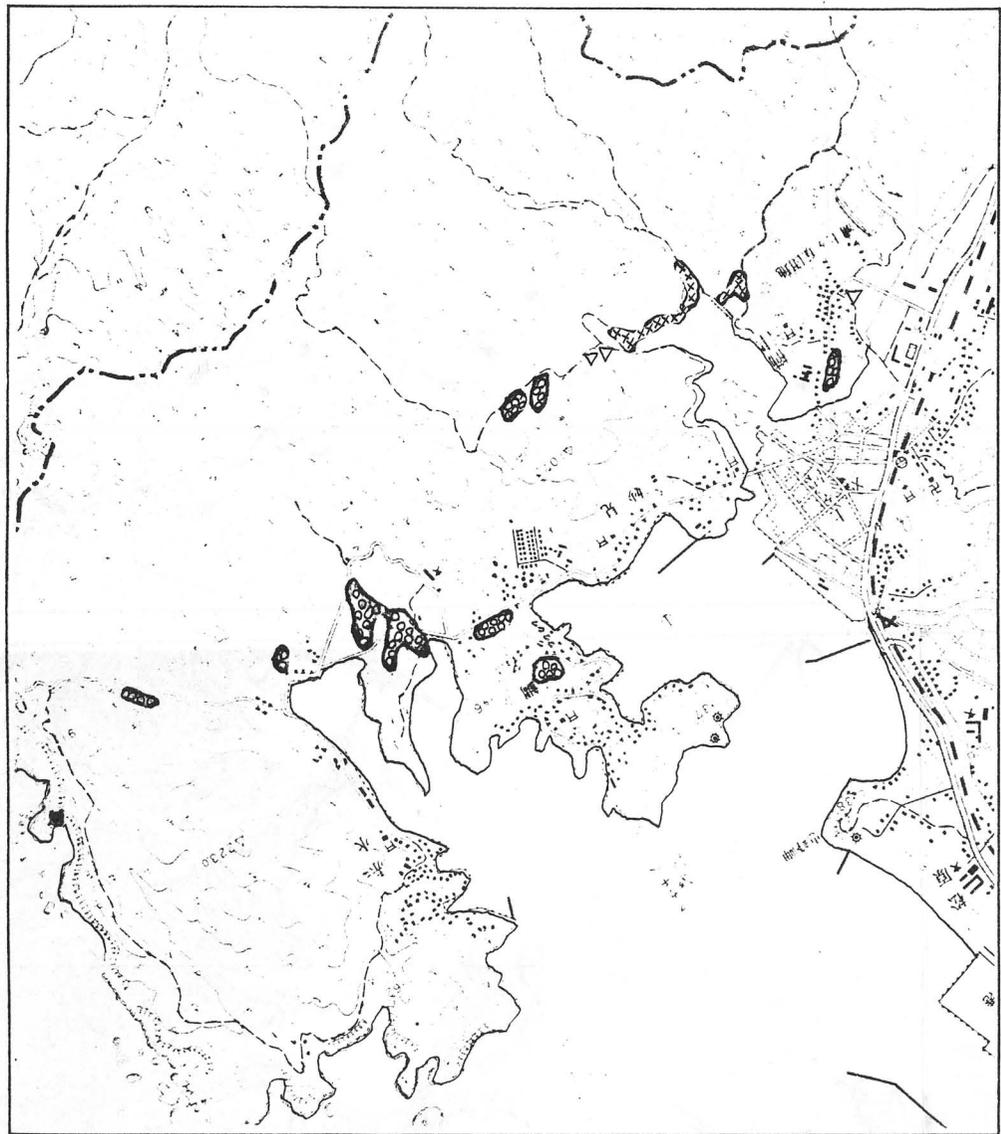
3 : 成迫



VI 図 版

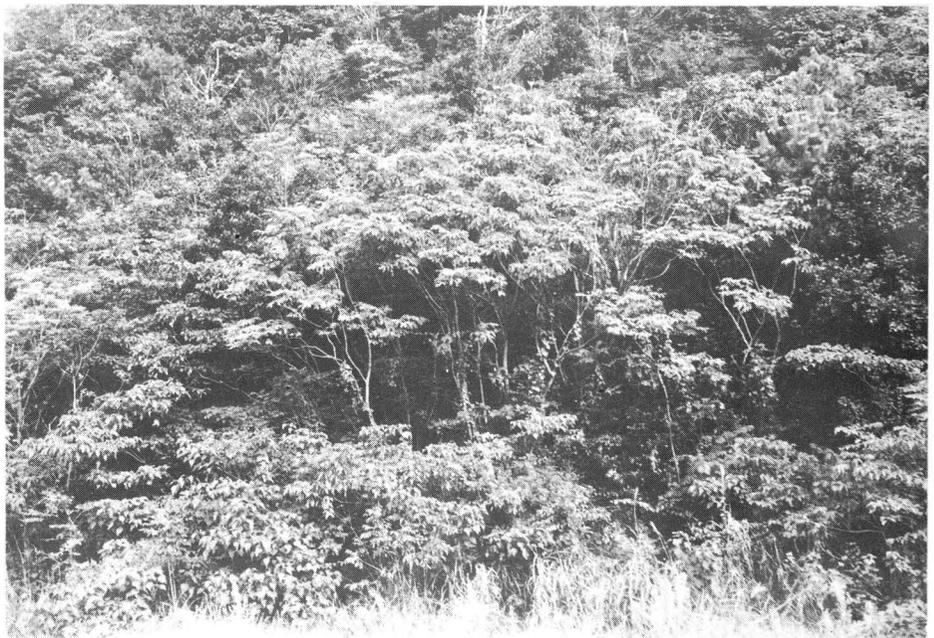


- オオバネムの自生地 (群落)
 - △ オオバネムの自生地 (単木)
 - × 塩沼植物(草本)の自生地
 - ハマボウの自生地 (群落)
 - ハマボウの自生地 (単木)
 - ハマナツメの自生地 (群落)
 - ▲ ハマナツメの自生地 (単木)
- 1980年調査





1. 正面の山の手前の下部にオオパネムノキの群落が見られる。左上の台地は鶴ヶ丘 沖田町



2. オオパネムの群落（中央） 塩浜町



3. 写真中央にオオバネムの萌芽がみられる 沖田町



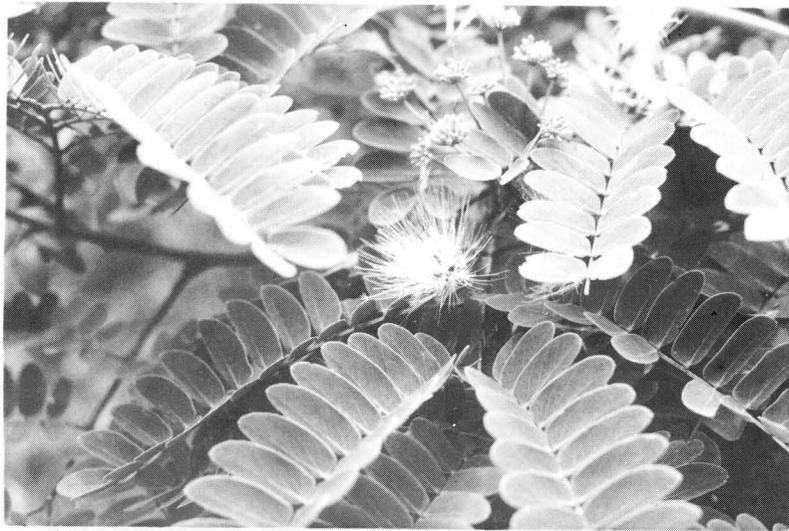
4. 電柱の右横にみられるオオバネムノキ, 沖田町. 若葉町.
椿ヶ丘ではこのように住宅地の中に単木で生えている。 若葉町



5. オオバネムノキの葉



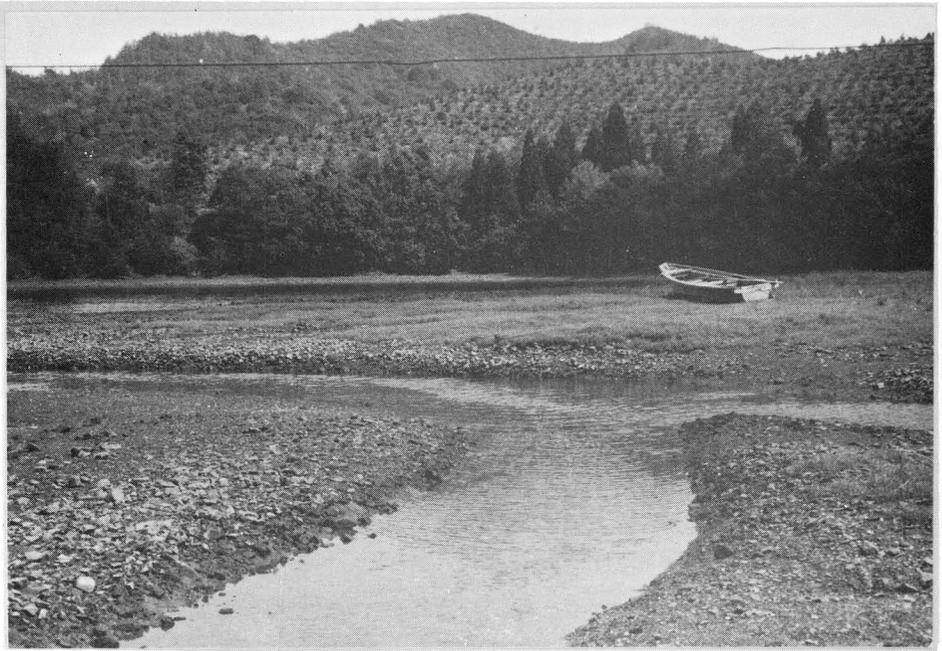
6. オオバネムノキの樹皮。直径15cm 片田町



7. オオバネムノキの花 若葉町



8. オオバネムノキの種子 塩浜町



9. 舟のまわりにナガミノオニシバ、ウラギク、ハマサジ、
ハマツナがみられる 浦城町浦場



10. 中央の低地に塩沼植生の分布がみられる 島浦町比井の浜



11. ハマサジ、ハマツナの群落 島浦町



12. 中央の凹地にシバナの群落が見られ、ややそれより高くなると
オニシバが生育する。右上のやや丈の高い植物はウラギクである
浦城町甫場



13. ウラギク

浦城町甫場



14. ウラギクの花

浦城町甫場



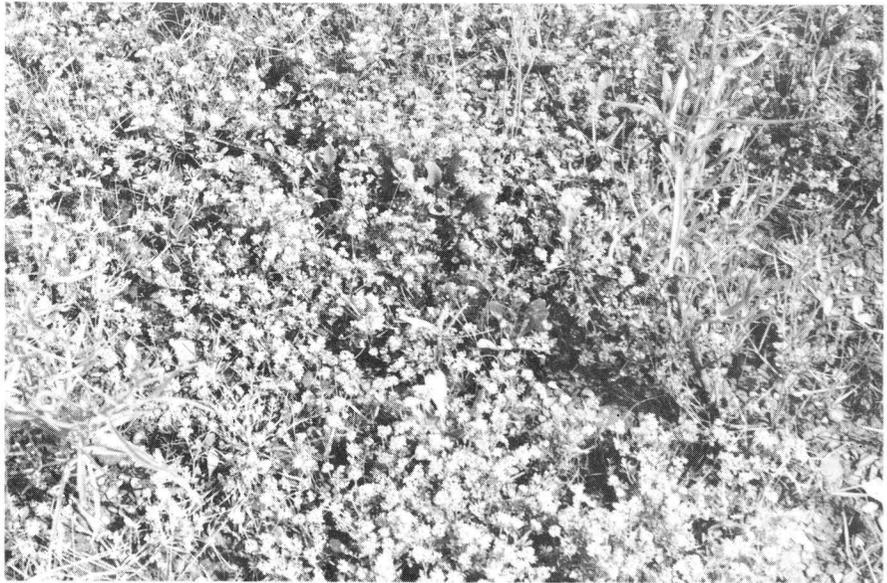
15. シバナ…花をつけている 浦城町甫場



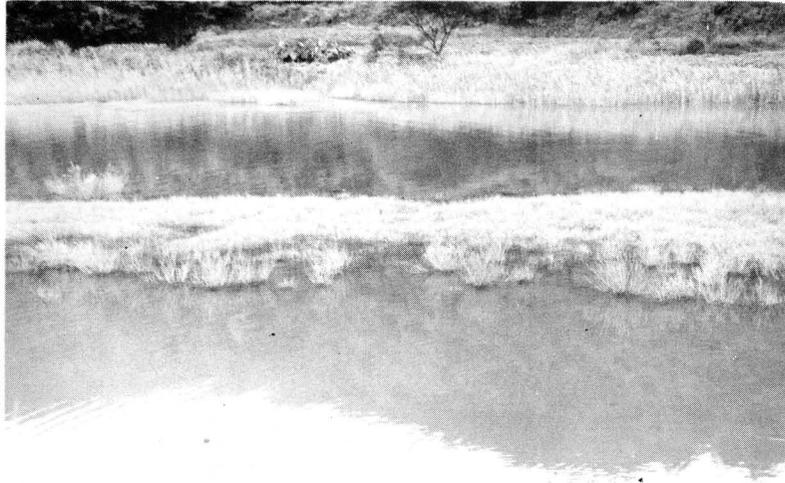
16. 砂・礫上に点在するハママツナとハマサジ. 中央がハママツナ.
まわりのロゼット状のものがハマサジである 浦城町甫場



17. ハマサジとハマツナ 浦城町甫場



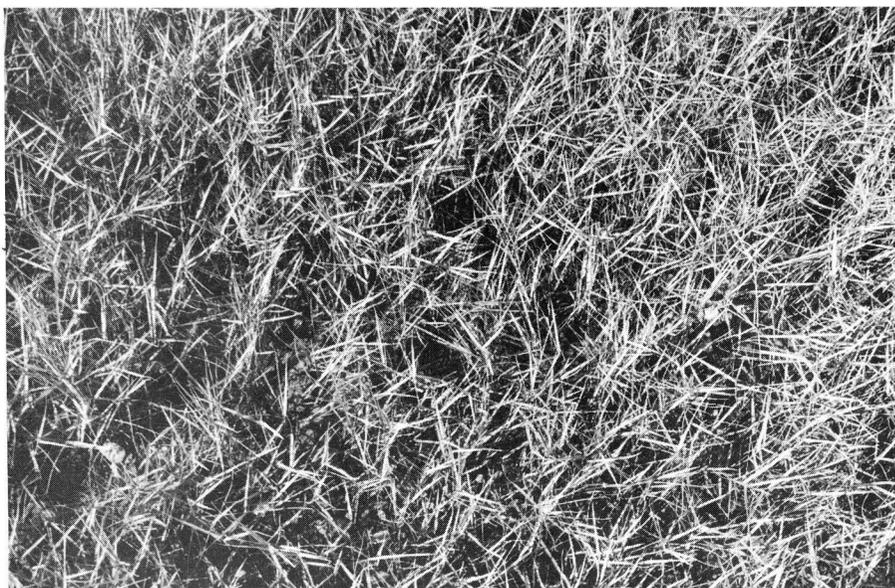
18. ハマゼリの群落が全体に広がっている．この中にハマサジ，
ウラギク，ナガミノオニシバが点在する 浦城町甫場



19. 中段にみられる群落はナガミノオニシバである．周辺にはハマサジ(開花)がみられる．後はヨシノ群落 蘆津町



20. 中央の凸状地にナガミノオニシバがみられる



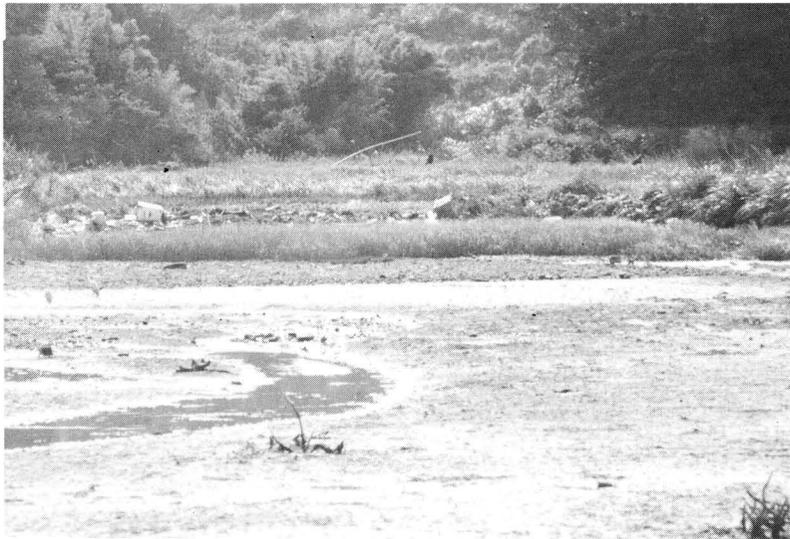
21. ナガミノオニシバ. このようにカーペット状に広がる 榎津町



22. シオグクの群落. 左上はヨシ 塩浜. 沖田川河口



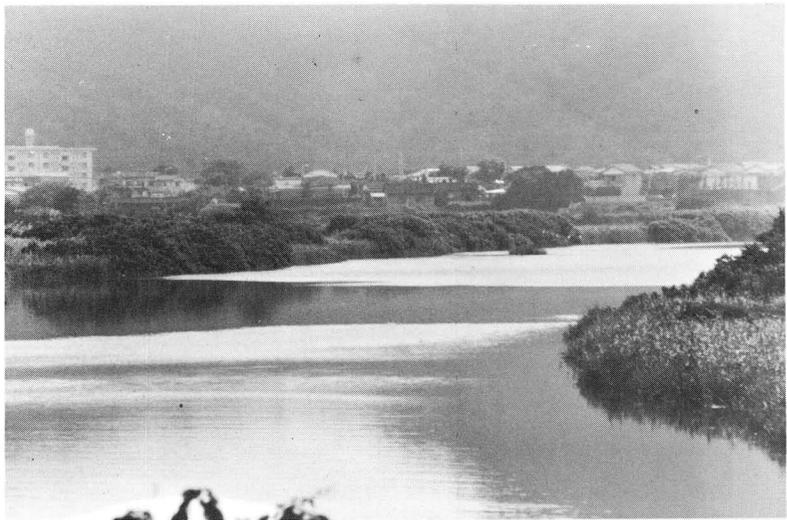
23. 満潮時に冠水したハマサジ，上部に伸びているのは花である 櫛津町



24. 中段の低地に分布するシオグク，シバナの群落 櫛津町



25. 河岸に生えるハマボウ 沖田町河口



26. 沖田川の河岸にみられるハマボウ，写真中段のこんもりとしているのがハマボウ．草本はアシである．後のは，伊形一ヶ岡の住宅地



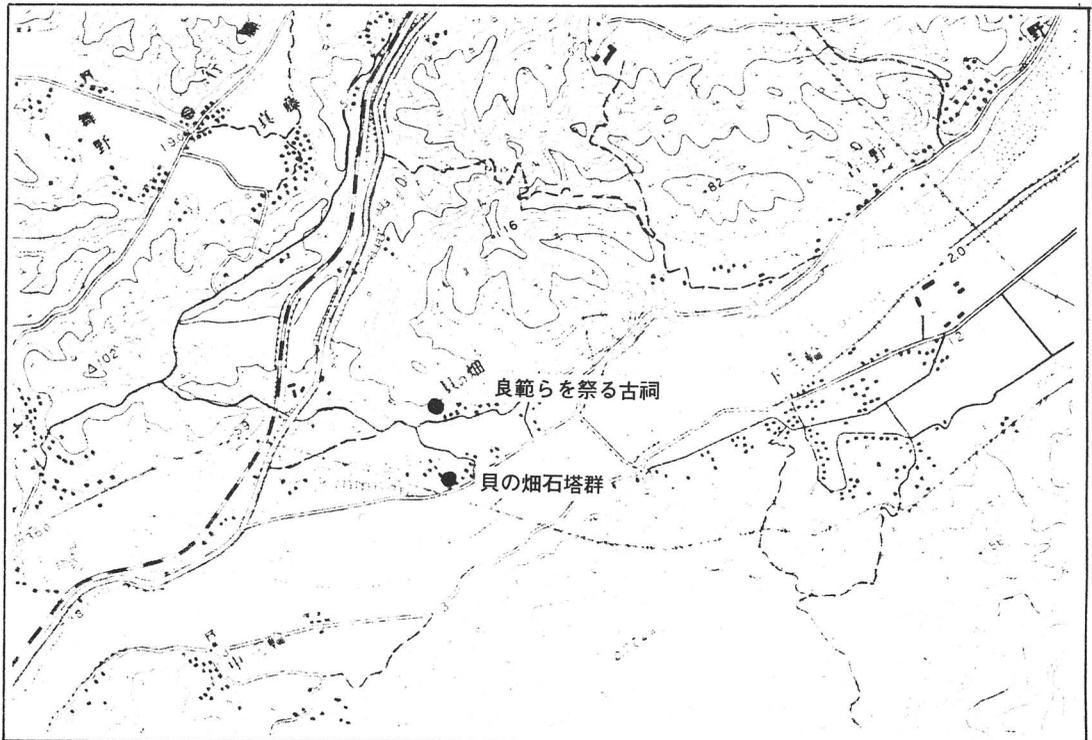
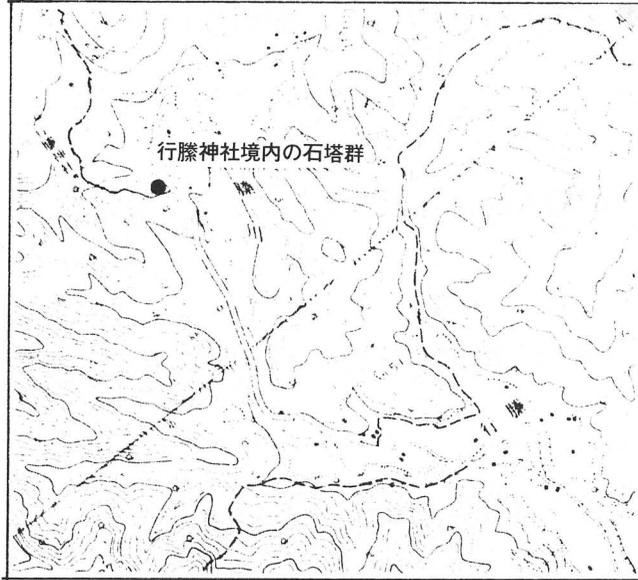
27. ヨシの中にこんもりと茂っているのがハマボウ 沖田川河口



28. ハマナツメ 沖田川河口

延岡市貝ノ畑および行滕神社境内の石塔群調査報告

石 川 恒 太 郎



目 次

■ 延岡市貝ノ畑および行滕神社境内の石塔群調査報告

I 貝ノ畑石塔群	34
II 行滕大日寺跡の石塔群	37
III 石塔群の地方史的意義	38
IV 図 版	42

延岡市貝ノ畑及行滕神社境内の石塔群

1. 貝ノ畑石塔群

貝ノ畑の石塔群は同市貝ノ畑町2415番の2の山林にあるもので、写真1に見えるのが東の方から見た全景である。貝ノ畑は五ヶ瀬川の北岸にある段丘で、南は五ヶ瀬川に臨み、北は国道218号線が東西に走っており、川と国道とに挟まれた所であるが、現在は東方の吉野町方面から河岸に沿って西進して国道218号線に接続する道路が通じている。この道路が国道に接続する所の東から細長い丘地が道路の北側に東西に横たわっており、この丘地は東と西とに標高30mの丘頂をもっており、東の丘頂は部落の上に約15mの比高をもっているがここに石塔群がある。

ここの石塔群は古くから在るもので筆者が初めてこれを見たのは、昭和41年3月に貝ノ畑の弥生時代の住居跡の発掘を行った時であったが、その後注目されるようになり、古くからこの墓地を管理している山崎建設の社長、山崎雄章氏の手によって整理されたが、今年(54年)3月14日市教委社会教育課の、牧野義英主事とともに調査した結果石塔の数は361基で、ほかに五輪塔の崩れで1基を成さないものなど、計算外としたもの数基があった。

A. 石塔の種類と数

ここの石塔群にはいろいろの石塔がある。その中でも最も多いのは五輪塔であったが、以下各石塔の種類と数について記そう。

a. **五輪塔** 五輪塔というのは写真2. 3に見えるように五つの部分からできているもので、この五つの部分を上から空輪、風輪、火輪、水輪、地輪と呼ぶが、これは仏教の教典に則り取ったもので、五輪塔は密教の思想を伝えたもの、万物は空風火水地という五つの元素から成るものであるということを表わしており、頂上の空輪は宝珠形、その下の風輪は半円形、その下の火輪は屋根のようであるが、これは三角形を示すもので、その下の水輪は円形、一番下の地輪は方形である。密教では水輪の円と地輪の方は本体すなわち実在界の形であり、宝珠形の空輪、半円形の風輪、三角形の火輪は変体すなわち現象界であり、常住不変の実在界の上に変幻極まりない現象界を配した形で、現象界の三輪は実在界の分離結合であるとなす。方形の半分が三角形を組み合わせた火輪であり、円形の半分が風輪で、その上に両者を結合させたのが空輪で、現象即実在、これが大日如来の三昧耶形であるという。

それで五輪塔は平安時代の後期(約800年位前)に伝えられたが、それから鎌倉・南北朝

・室町・江戸の各時代を通じて墓としても供養碑としても用いられた。ここの五輪塔の数は221基であったが、刻文のあるものは14基で、紀年のあるもので最も古いものは文明14年（1482）のものである。それでここの石塔群の年代は、文明年間前後からその以後のものと思われる。

五輪塔の中で最も大きいものは写真2の上段左に見えるもので、総高130cm、空輪の高さ26cm、風輪14cm、火輪38cm、水輪36cm、地輪16cmで、地輪の幅68cm、水輪50cm、火輪56cmで、特に火輪は屋根形をなして、軒の高さを増しているのが注目される。

b. ^{いたごりん}板五輪 4基 これは五輪塔のように、石を積みあげないで、1本の平たい石に五輪塔の形を切り出しているもので、写真4と5がそれで、写真4の低い方は地輪が折れたものらしい。写真5が最も高く、また形もよくできている。これは高さ127cmで幅24cm、厚さ25cmの板石に空輪21cm、風輪11cm、火輪13cm、水輪14cm、地輪60cmで平たい石で造っているのが板五輪と呼ぶのであるが木製のものもある。

c. ^{いたひ}板碑 2基 これは写真6に示した倒卵形の二個の石が重なって倒れているもので、写真ではわかり難いが、上の方に横筋が二本描かれている。板碑というのは四角な長い石の頂上を三角形にしてその下に横に二線を引いて紀銘があるのが普通であるが、これは簡略化された形で、供養碑が多い。文字が見えないのは墨書されていたのであろう。

d. ^{せき}石 ^{とう}塔 121基 ただし前の板碑2基を含むから、正しくは119基である。これは写真7に見える長い自然石の立っているもので、その1面が滑らかになっているが、ここに紀年や銘文が墨書されていたのであろうが、永い年月の間に風雨に洗われて銘文の残っているものは皆無である。

e. ^{かくごりん}角五輪（伊東塔） 14基 これは写真8に見えるもので、五輪塔と同じような形であるが、水輪が円形でなく方形となっているものである。この地方の人の語る所によると、この形式の墓は、戦争に出陣する武士が戦死を覚悟して、自分の墓を建てて出陣したものであるというが、戦死者であることを表わすために角五輪にしたというのもおかしいし、他の地方に見ない習慣でもある。また女性の墓が混っていることからもおかしく思われるのである。

^{とうとう}都於郡城（西都市）を根拠として日向国に覇権を打ちたてた伊東氏の一族が用いた墓に伊東塔と呼ばれるものがある。これは礎石の上に方形の石が乗り、その上に^{ほうざい}宝篋印塔のような上が階段状になった屋蓋（但し^{ばに}馬耳はない）が乗り、その上に^{ふく}伏鉢、^く九輪、^{ほうじゆ}宝珠が乗る形式である。この伊東塔を簡略化したものとも考えられるが、何れにしても注目される石塔である。

f. 竿石 1基 これは写真9に見える大きい立石で、写真のように縦に大小4個の凹みが見られる。高さ118cm、径32cmである。六地藏碑の竿石のようでもあり、立石に4個の窪みを作って竿石を五区に分けているのは、五輪塔を略したものとも考えられる。

B. 銘文 この石碑群の中で銘文が刻まれているのは16基で、五輪塔14基、伊東塔2基であるが、それらを年代順に並べて見ると次のようになる。

1. 文明十四天壬寅、五月十一日、妙行禪尼。(1482)
2. 享祿五年壬辰、三月二十六日、権律師快義。(1532)
3. 権律師
4. 享祿五年壬辰三月二十六日、道春禪定門。(同上)
5. 享祿五年壬辰三月二十六日、道心禪門。(同上)
6. 享祿五年壬辰三月二十六日。(同上)
7. 道春
8. 天文十五丙午二月十二。(1546)了源
9. 天文廿年辛亥九月十六日、奉造立青王大姉禪定尼。(1551)
10. 永祿十三天庚午三月吉日孝子敬白、為逆修善根月□禪定尼。(1570)(伊東塔)
11. 天正十五天丁亥五月廿五日、秋月妙蓮禪定尼。(1587)(伊東塔)
12. 慶長十五年庚戌菊月吉祥日、奉逆修盛久禪定門靈位。(1610)
13. 慶長十五年庚戌菊月吉祥日、奉逆修盛久禪定尼靈位。(同上)
14. 庚戌正月廿六日。仙養。(同上)
15. 大峯、良範。
16. 豊後、明阿。

以上の通りであるが、同じ日に建立されたものがあり、2. 3. 4. 5. 6. 7の6基は同じ日に建てられたとする公算が大きい。少なくとも2. 4. 5. 6は同日の建碑で、道春禪定門と道心禪門は同族であろう。また12と13も慶長15年菊月(9月)同日に建てられているが夫婦であろう。逆修は年長の者が年少の者の霊を弔うことである。大峰、良範、豊後、明阿というような銘文は弔われた人、つまりその人の霊を供養するために建てられたものである。

2. 行藤大日寺跡の石塔群

延岡市行藤山^{ひかば}の行藤神社に入る北方^{だいじょうじ}に旧大日寺跡があり、ここに多くの石塔群が山林中に在る。自然石の巨大なものを建てたものに混って五輪塔や宝篋印塔がある。大日寺関係のものと思われるが、大日寺については『日向地誌』に、

「大日寺址

宗派審ナラス行藤嶽ノ南腹ニアリ正徳ノ頃廃ス今行藤神社の疆域ニ属ス相伝フ大日寺ノ側、西ノ坊、南ノ坊、北ノ坊ト呼フ三寺アリト其墟今詳ナラス。」

とある。ここの石塔について牧野義英主事（当時）が埋もれた石を掘り起して原形に復した後に調べたところによると、ここにある石塔数は五輪塔の完全なもの20基、不完全なもの（水輪を欠ぐなどの類）5基、宝篋印塔の完全なもの1基、自然石の石塔24基、外に宝篋印塔の不完全なもの数基であると報じて来た。筆者も後に行って確かめた。

宝篋印塔^{ほうきやくいんとう}は五輪塔より複雑な形であるが、中世の様式は基礎台座の上に屋蓋^{やくがい}をのせた塔身^{とうしん}があり、屋蓋はその上下に数段の階段を設けており、四隅に耳形の突起^{みみみみ}（馬耳）があるのが特徴である。屋蓋の上には相輪^{さうりん}があるが、相輪は下から露盤、伏鉢（覆鉢）^{うくはち}、請花^{うけはな}、九輪^{きゅうりん}、宝珠、から成っている。この塔は宝篋印陀羅尼^{ほうきやくいんだらに}の中に蔵めた塔だから宝篋印塔と呼ぶので、塔身の正面に円形に梵字と被葬名を書き、基礎に造立者や年号を書いているものが多い。

銘文 ここの石塔群では宝篋印塔に銘文のあるものが多い。そのうち主なものは次の通りである。

1. 文明六甲午八月日、逆修善根、七分全徳。権少僧都快良、良範。（1474）
2. 文明十年戊戌四月廿七日。（1478）
3. 文明十年戊戌六月廿二日。大阿闍梨伝燈秀尊、願主作者、祖永、快肇、（同上）
4. 永正十二年乙癸七月九日、奉為道盛、河崎主計。（1515）（伊東塔）
5. 千時慶長十年乙巳二月十四日、権大僧都法印快玄、北之坊別当。（1605）（宝塔）

これらの銘文によって知られることは、『日向地誌』に大日寺には西ノ坊、南ノ坊、北ノ坊と呼ぶ三寺があったとあるが、(5)によって北之坊別当の権大僧都法印の名があるからこれら三寺が存在したことが知られる。しかもこれらの坊の別当は法印（僧の最高の位）であったことも解る。また(4)によって河崎主計という人が道盛という人のために供養碑を建てているが、河崎姓は貝ノ畑に多いので、貝ノ畑と大日寺に何らかの繋がりがあることが察せられるが、その点について更に注目せられるのは、(1)によって権少僧都快良の墓を建てている良範は、前に見た貝ノ畑の石塔群の中に大峯、良範の供養のために建てられた五輪塔（15）があったことである。

この良範は貝ノ畑の石塔群のある岡から北方の水田を隔てた対岸の岡の上に古い祠があり、祠の周辺には一字一石経に用いるような円い扁平な川原石が一面に敷かれており、祠内に三

基の石塔が祀られているが、その向って右（東側）の石は卵塔（無縫塔）に似た形で「良範法印位．永正六年己巳六月十六日」とある。即ち良範は此所に祭られているから、恐らくこの出身者であろうと思われる。これら良範に関係のある大日寺跡と貝ノ畑の石塔群と、この祠の石塔とを見ると、良範は大日寺跡の(1)によって文明六年（1474）八月に権少僧都快良の墓を建てている。前に(5)で見たように大日寺北之坊の別当快玄は権大僧都法印であった。僧都そうづというのは僧官名で、大僧都、権大僧都、少僧都、権少僧都の四階級があった。それで(1)の快良は最も下の官であったから死んだ時はまだ若かったのであろう。良範が逆修しているところを見ると、快良は良範の弟か子だったのではなかろうか、良範は文明六年（1474）にこの墓を建てて永正六年（1509）の六月十六日に死亡しているから、墓を建てた後36年で死んだわけで、法印というような位になるためには長年月を要したわけで、貝ノ畑の良範の供養碑には記年がないが、天文、永禄ごろのものではないであろうかと思う。そして大日寺北之坊の別当快玄が権大僧都法印であったこと、良範が権少僧都快良の年上の縁者で、後に法印の位となっていたことから類推すれば良範法印は行藤大日寺の三坊中いずれかの別当であったと見るのが妥当のように思われる。貝ノ畑から行藤神社までは約6.4キロであるから、当時の人の足では1時間で達したであろうと思われる。

3. 石塔群の地方史的意義

さて以上に見てきた石塔群はどのような人々の墓で、その存在が延岡市地方の歴史にどのような意義を持つかということを考えてみよう。前に述べたごとく、これらの石塔群は行藤山にあった大日寺と関係のある墓や供養碑であって、それは修験道関係の石塔である。『日向地誌』には大日寺について

「宗派つむら審カナラス。」

と書いているが、行藤神社については、南方村の部に

「行藤神社 郷社行藤嶽ノ南腹ニアリ社地広、二町八反五畝十一歩速玉男命、伊弉册命、はりたまのおのみこと いざなのみこと事解男命ことときわのみことヲ祭ル養老二年戊午四月十五日創建スル所ナリ旧称行藤三所大権現ト云明治四年辛未今名ニ改ム例祭九月十九日社域老樹鬱然。」

と書いている。この旧称行藤三所大権現というのが修験道（山岳宗教）の熊野三山を表わしている。『日向古文書集成』（県発行）に収録されている「行藤神社文書」には永仁二年（1294）に平某が行藤岳の別当職に如心房静全を補任した文書と、正和三年（1314）に静全が別当職を弟子の律師慶全に譲った文書と、沙彌しやみ親崇（沙彌は出家した人）が元徳元年（1329）に行藤神社に山野を寄進した文書および別当慶全が熊野参詣に行くに当って元弘三年（1333）に別当職を実道上人に譲った文書が掲げられている。別当慶全が修験道の本山熊野に参詣しているので、ここが修験道の寺であったことが知られるが、「日向地誌」も行藤の

「秘密の窟」について、

「行藤嶽ノ南腹ニアリ窟高凡一丈八尺深三間、幅三間、藩治ノ時修験ノ徒籠居シテ雨ヲ祈り如クハ病ヲ祈ル所ナリシヲ秘密ト云ハ眞言秘密ノ義ニ取リシト見ユ」

と書いている。また日向市財光寺の法華宗定善寺の開基日叡上人の事蹟を伝ゆる古記録に、

「日叡上人之事 抑モ日叡上人ハ高祖日蓮上人ヨリ第五代ニ当リ玉フ日向法花宗之開基也、延慶ニ己酉年当国富田庄山南郷日知屋村原定善寺ニ生レ玉フ、俗姓秦氏河勝廿三代ノ後胤甲斐法橋隆覚ノ二男也、日知屋村ハ甲斐上総守ノ所領也上総守ハ日叡ノ兄日叡上人眞言宗タリシ時ハ薩摩法印ト称シー宗中ニ秀ツ云々。」

と書いてある。現在の行藤神社の祠官の甲斐氏は、この甲斐法橋隆覚の子孫である。ここに日叡上人が眞言宗の時は薩摩法印と称したとあるが、貝ノ畑の石塔群中の五輪塔に「豊後、明阿、大峯、良範」などと刻まれているのはこのようなものであろう。

さて九州における修験道の霊山は「太宰管内志」によれば118山あり、その内日向国には7山があったとある。それは高千穂山（高千穂神社）太伯山（諸塚山）行藤山（行藤三所大権現）霧島山（霧島東神社）法華岳（法華岳寺）狗留孫山（羽山積神社）祖母嶽（熊野神社）である。しかし九州では豊前国（福岡県）の英彦山が最も盛んで、ここの修験者が九州各国の修験者を指導したようである。

例えば藤寺非宝氏（高千穂町岩戸泉福寺住職）の著『諸塚太伯山調査録』（1937）によれば「豊前英彦山との関係」の項に、

「この太伯山上社に最も関係深かりしは、飯干城主の後胤たる藤岡家（菊池氏）であって同家にそれらゆかりの記録や文書等を数多く保存してある。」

とあり、その中に英彦山の慈欽坊が書いた勸進奉賀帳や藤岡家の系図の写しなどがあり、系図の写しには最後に、

「英彦山修験第一座権大僧都法印慈欽坊二十一世主祥金剛隆欽謹ミテ之ヲ改ム云々」

と書いているとある。行藤神社の祠官甲斐氏の祖先は日叡上人の父甲斐法橋隆覚であったが、甲斐氏も菊池氏であることは衆知のことである。この慈欽坊が写した藤岡家の菊池系図には、前は略するが、

「菊池肥後守藤原重時 御子三人、此時諸国下行云々 — 菊池山城守藤原丹吾—菊池越前守藤原重唯（以下略）」

とあるという。だから御子三人の一人が行藤の甲斐法橋隆覚またはその祖先かも知れない。次に小川亥三郎氏（鹿児島県指宿市）の「開聞岳信仰について」（『英彦山と九州の修験道』名著出版社1977所撰）には、鹿児島県の開聞岳北麓の岩屋は昔山伏が修行した所と伝えられていたが、しかし確実な証拠がなかった。ところがこの岩屋に10基位の角柱板碑が見つかったとあり、次のような銘文があるとある。

永禄十丁卯十一月吉祥日、権律師頼□逆修。

永禄十丁卯□□日権律師頼密善得。

□□卯年十一月□□日道女逆修。

永禄□□十一月□□日権大僧都頼達逆修。

(以下略)

このものと同じで修験道(山伏)の墓または供養碑である。但し碑の高さは40センチ内外で山川石であると書いてある。

(附言) 堂ン馬場について

貝の畑の石塔群のある丘地を土地の人は「堂ン馬場」または「城ン馬場」と呼んでいる。何れにしても馬場という地名のところは中世の城址が多い。馬場は武士が戦場に向うための乗馬を調教する場所で何れの城にもあるが、城といっても、古い豪族が住居した屋形または圍というようなものも含まれる。例えば高千穂町向山の三田井氏累代の住居であった中山御所、南北朝時代に活躍した高千穂の芝原又三郎性虎の住居であった五ヶ瀬町桑ノ内の圍の如きは何れも一種の城である。この石塔群のある「城ン馬場」の地形を見るに、南は五ヶ瀬川に臨み、北側の東西に長い水田はもと河の跡で、この両河に挟まれた東西に長い長さ約500m、幅約125m、高さ約15mの丘地は周囲堀をめぐらしたように河を巡らしていたもので、現に西方に当時を偲ばせる池が3ヶ所残っている。城ン馬場の名のある所以である。

さてそれでは、この堂ン馬場に居住した豪族は誰であるかという問題になるが、これに関しては現在のところ、全く確実な資料がない。この石塔群を古くから管理してられる山崎建設KKの社長山崎氏の自家はもと、この丘地の東麓にあり、古くからの豪農で古文書なども在ったようであるが、明治時代の洪水で河水が天井に達する程で古文書や地券、家財家具類は全部流失してしまったということで、古くは後藤姓であったというだけで資料が残っていないわけである。

しかしここにこれだけの石塔群があり、その石塔は、前に見たごとく、修験道関係のもので行藤神社や同社の別当寺であった行藤山大日寺に関係のあるものであることが明らかになった。特にここに供養碑があり、北方の丘上に祀られている良範法印は行藤の大日寺に在った坊の別当であったと思われる。そして此所に祀られていることは此処に住居した人であることが考えられる。

ここにある供養碑には大峯、良範とあるがこの場合大峯は良範の姓ではなく、別な供養碑に豊後、明阿とあるのと同じで、大峯は法名と見るべきであろう。そうするとこの良範法印の俗姓がわからないことになる。それにしてもこの土地に祀られていることは良範法印がこの堂ン馬場に住居した人であろうということが推考される。

『日向国史』(上巻)に引用している「島津文書」によると、元寇後の正安三年(1301)十二月二十四日に尾藤左衛門尉時綱の所領日向国臼杵郡田貫田を異国降伏のため正八幡宮に寄進したとある。しかし日向国臼杵郡には田貫田という所はない。思うにこれは大貫を太貫

と訓んだのであろう。時綱も土持氏に信綱、景綱など綱という名の人が多いから土持氏であろうと思う人もあるが、喜田貞吉博士は、土持氏ではなく、北條氏の御内人（御家人）の尾藤氏であると『日向国史』に書いていられる。この尾藤氏は尾張守の尾と藤原氏の藤を取った姓と言われ、藤原氏または紀氏の子孫で肥後国の国司となった尾藤（紀）隆房などがあつた。もし田貫田が大貫であれば、貝ノ畑あたりも尾藤氏の領地であつたかも知れない。

北方村久保山の甲斐家に滝本大権現の祠官になつた家があり、この家に伝える系図によると、

「藤原姓 甲斐氏系図家伝記

本名菊池小名黒木、山崎、赤星、村田、甲斐 一姓」

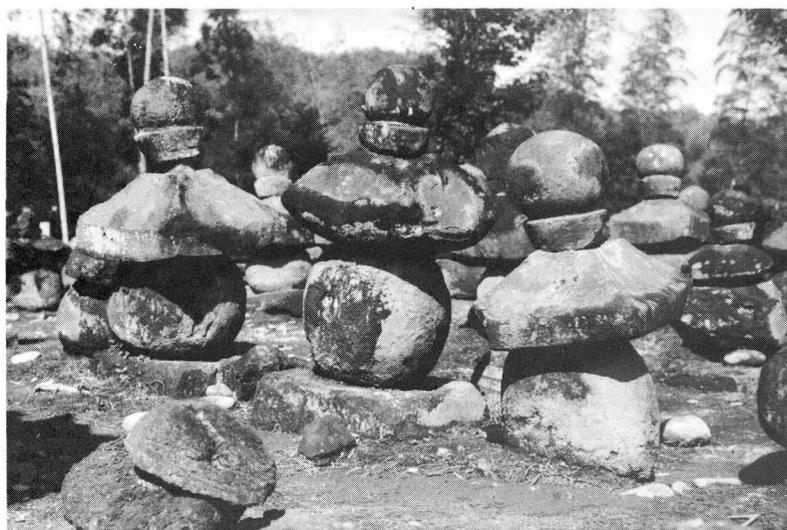
とある。つまり甲斐、山崎、赤星、村田、黒木などはみな菊池の小名（分家）であるという意味である。だから山崎氏はもと後藤と称したというが後藤、尾藤、菊池も行藤神社祠官の甲斐氏と本源を等しくする家であることが知られるのである。良範法印もまたこれらの姓の人ではないかと思うのである。



1. 東の方から見た石塔群のほぼ全景



2. 五輪塔 上段左のものが最も大きなものである(総高130cm)



3. 五 輪 塔



4. 板 五 輪



5. 板五輪(高さ127cm. 幅24cm. 厚さ25cm)



6. 板 碑



7. 石 塔



8. 角 五 輪



9. 竿 石(高さ118cm 径32cm)



10. 大峯. 良範の銘文が刻まれた五輪塔



11. 良範らを祭る古祠



12. 祠内にある良範の銘文のある石塔



13. 良範の銘文のある石塔…行藤大日寺跡



14. 行藤大日寺跡の石塔群の一部

延岡市文化財調査報告書 II

発行 昭和58年3月31日

延岡市教育委員会

・ 延岡市東本小路2-1

編集 延岡市教育委員会 社会教育課

印刷所 有限会社 文苑印刷社